

# おわりに

獣医学教育に対する社会の期待や要望が年々高まる中、感染症制御の一端を担う獣医師をいかに教育するかというのは獣医系大学における大きな課題となっている。また、大学内の事故に対する社会の目は厳しく、事故防止のための具体的な対策を早急に講じる必要に迫られている。しかしながら、安全を確保しながら高い知識や技術レベルを身につけさせることは、動物や病原体などの生体を扱う獣医学教育において、困難な面も多い。感染症教育は、まさにこのようなジレンマに陥っている状態である。このような大学の苦悩の一方で、平成19年11月に報道された東大研究グループによる「大学生の4人に3人は、自分で勉強するより、必要なことはすべて授業で扱ってほしい」という意識調査結果が如実に表しているように、学生の学習に対する受け身傾向は強まっている。「人獣共通感染症教育モデル・カリキュラムの開発」事業では、このような状況における理想的な感染症教育の模索を平成17年度以来続けてきた。3章でも触れた通り、以前の宮崎大学の教育環境は恵まれているとはいえない状況であったため、いざ改善しようとなると、理想は膨らむ一方で、どこから手を付ければよいか迷う事態となった。そこで、問題点をピックアップして整理し、最も効率よく改善するためには、何を变えるべきか、一つずつ順序立てて検討した。結果的には、この過程こそが教育改善のための大きな糧となったといえる。こうした検討の中、これまで大学側が「よりわかりやすい授業を」「丁寧な教育を」と努力してきた結果が、学生の受け身傾向を形成していることにも気づいた。「わかりやすい授業」と「学生が努力しなくても理解できる授業」は全く別個のものである。そもそも学生にとっての感染症学は、微生物学の応用編、あるいは膨大な疾病について覚えなくてはならない科目という認識が強く、大した内容ではないのに努力を強いられると敬遠されがちである。このような思いこみにとらわれた学生に、「社会学的要素の強い臨床科目」という認識を植え付けるのも、感染症学が覚える科目ではなく、考える科目であることを理解させるのも、道のりは非常に険しく、正にこの点での苦労でもあった。恐らく今後もこの苦労は続くと思われるが、ある学生が机上演習の感想で述べたとおり、感染症制御には理論的に「一連の流れ」があり、行き当たりばったりの対策では無いということを、一人でも多くの学生が感じ、積極的に立ち向かう意欲を持つようになることを信じて努力し続けたい。教育に「完成」という言葉や「終わりが無い」ことは言うまでもないが、全国大学を対象とした獣医学教育のコアカリキュラム作成など推進されている中で、一つのモデルとして参考になればと一冊子にまとめた。平成22年以降も北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター特定共同研究「人獣共通感染症の教育モデル・カリキュラムの策定と共同実施」事業を通じて卒業教育を含めた人材育成を継続しているので、その後の成果も機会を見て報告していきたい。

同プロジェクト事業は、宮崎大学農学部獣医学科の教員が中心となって進めているが、これは学内外の協力があってこそその賜物である。この場を借りて、深謝申し上げますとともに、今後ともご協力をお願いしたい。